

# 美乳の秘密

睦月影郎



## 第一章 妖艶なボス

1

「朝井くんよお。全然成績が伸びてないぞ。給料泥棒のまま、会社に申し訳ないと思わねえのか？」

営業課長の細田が言った。朝井が、オフィス随一の美人OL、祐美の入れてくれたお茶をノンビリ飲んでいたのが癪に触ったのだろう。

朝井はお茶を飲み干して、営業に出ようと渋々立ち上がった。

細田課長の不機嫌には、もう一つ理由があった。部長が定年退職したため、自分が昇進できると思っていたのに、当てが外れたのである。

朝井昇一は三十歳になったばかり、独身の営業マンだった。会社は『ユーキ』と言い、元は結城技研というモーターバイクのメーカーだった。朝井は、新製品である軽くて充電容量の大きい電動自転車を主婦たちに売るため、外回りを担当していた。

「いてもいなくてもいい社員は、遠慮なく辞めてもらって構わないんだがなあ」  
細田はまだ言い足りないように呟いていた。

「いてもいなくてもいい人なら、私がお借りしてよろしいかしら」

と、その時、いつの間に入ってきたのか、目の覚めるような長身の美女が言った。まるでオフィスの照明が倍になったかのように彼女の周辺だけ明るくなり、新人OLの祐美などは憧れの表情でぼうつと見とれるほどだった。

「なんだ、あんだ。どこの課のものだ」

振り返り、細田が不機嫌の矛先を変えたように言ったが、一瞬彼女の美貌に威圧さ  
れて目を丸くした。それでも、すかさず好色そうな眼差しで美女の胸や腰に視線を走  
らせた。

「この課よ。私は川野紗貴子」

「あ！ 新任の営業部長……」

細田が慌てて立ち上がり、自分より二つ三つ年下であろう美女に深々と頭を下げた。  
何しろ上司には腰の低い男なのだ。

「わ、私は営業課長の」

「挨拶は歓迎会の時でいいわ。急ぎのプロジェクトがあるから。じゃ来て、朝井くん」  
紗貴子が言い、先に颯爽とオフィスを出ていった。なぜ自分が呼ばれたのか小首を  
かしげながら、朝井も足早に彼女に従った。

新たな部長が来ることは知っていたが、聞いたことのない名だったので、どこか他

社から引き抜かれたやり手のオバサンだろうと思っていたのだが、紗貴子はまだ三十代後半だろう。

朝井の名を知っていたと言うことは、この新任部長は、すでに営業部の名簿に一通り目を通していたようだった。

「あの、プロジェクトって何ですか？　どうして僕を選んだんですか？」

他にも優秀な社員が揃っているのに、と朝井は怪訝けげんに思って訊いた。

朝井は勉強もスポーツもパツとせず、二浪したうえ五年かかってようやく大学を出て、幸運にもユーキに入社できたのだ。しかしこの五年間、成績はふるわずリストラされないのでが不思議なぐらいだったのだ。

もちろん彼女もおらず、趣味といえば読書とネットサーフィンぐらいのものだ。営業では、新型の電動自転車を積んだ社の車で移動し、多くの主婦を訪問してきたが、仕事どころかポルノ小説にあるような人妻の誘惑にも巡り会ったことがなく、四六時中悶々とした日々を送っていた。

「今に分かるわ。言葉より、見てもらった方が早いのに」

「じゃ、どこへ行くんですか？」

「君のマンションに寄ってから、私の家へ」

「え……？」

社屋の地下にある駐車場に行った紗貴子は、自分のものらしいベンツの助手席に朝井を乗せ、すぐにスタートさせた。

朝井の住所もすでに調べていたらしく、紗貴子の運転は迷いがなく、やがて三十分ほどで彼のマンションに到着した。

諸々の疑問を抱えながらも紗貴子が何も言わないので質問を控え、ここからは朝井が案内して五階まで上がり、彼女を部屋に招き入れた。女性が入ったのは、故郷から出てきた母親以外では初めてだった。

紗貴子は遠慮なく上がり込み、室内の様子を見回した。回りくどい説明より、まず行動を起こし自分の目で確かめる性格のようだ。

部屋はワンルーム。奥の窓際にベッドがあり、テレビと本棚、パソコンにテーブルがあるだけだ。あとはキッチンとバストイレである。

「ふうん、感心に片づいているのね」

「ええ、掃除はしないけど整頓はします」

朝井は、独身男の匂いを追い出すように窓を開けながら答えた。

紗貴子は興味深く、彼の本棚の背表紙やビデオラックを眺め、中からエロ本やアダルトビデオを引っ張り出した。

「あ、それは……」

朝井は慌てて取り返そうとしたが、紗貴子は返してくれず、彼のセックスの傾向でも調べるようにタイトルを見まわした。

「気にしないで。独身男性なら、こういうのがあって当たり前よ。それもあって不意打ちで訪ねたのだから」

「え……？」

「そう。君を選んだ理由の一つは、独身者だから。積極的に彼女を作るタイプではなく、真面目だけれど要領が悪く、おとなしい人を捜していたの」

紗貴子が、本とビデオを戻して言う。それでも朝井には、まだピンとこなかった。

「恋人を持った経験は？」

「ありません。片思いばかりだったから」

「風俗は？」

「あまり金がないから、一、二度ソープに行っただけです」

彼の言葉に紗貴子は頷き、さらに彼女は朝井の度肝を抜くことを言ってきたのだ。

「オナニーは、どれぐらいのペース？」

「そ、そんなこと、プロジェクトに何か関係があるんですか……」

「あるわ。正直に答えて」

「毎日、寝る前に一回。それと、金曜と土曜の夜は二回ずつぐらい」

「じゃ、月に四十回近くね。どの位置で、どんなふうにするの？」

紗貴子が表情も変えずに言う。からかっているのではなく、あくまでも眼差しは真剣そのものだ。

だが朝井は、年上の美女と二人きりで激しく舞い上がっていた。スーツの上からでも紗貴子の胸の膨らみは分かるし、腰のラインも実に熟れて艶めかしかった。しかも自分の匂いのする部屋に、徐々に女の甘いフェロモンが混じって籠もりはじめているのだ。

「ビデオを見るときは、そこの座椅子で。ネタがないときはベッドに横になって……」  
「実際に、その格好になってみて」

言われて、朝井は混乱したままベッドに横たわった。彼女の、美しく妖しい眼差しにじっと見つめられると、何やら催眠術にでもかかったように、身体が言いなりになってしまうのだった。

左を下にして横になり、利き腕をズボンの上からそつと股間に当ててみた。

「それじゃ分からないわね。本当にしてみても」

「そ、そんな……」

朝井は驚いて声を上げ、長い脚でスツクと立ち、自分を見下ろしている紗貴子を振り仰いだ。

「上司の命令よ。脱いで実演しなさい」

紗貴子が言う。どうやら冗談ではなさそうだった。

朝井は弾む呼吸と高鳴る胸を押さえ、半身を起こして上着を脱ぎ、恐る恐るベルトを外しはじめた。紗貴子の制止を待ったが、それはなく、やがて朝井はズボンを脱ぎ去った。さらにトランクスに指をかけ、最後の確認をするように紗貴子を見上げたが、彼女の表情は変わらず、観念して脱いでしまった。

すでにペニスははちきれそうなほどピンピンに突き立ち、朝井は再び横たわってペニスを握った。

いつもの体勢でオナニーをはじめたものの、じつと見つめられると動きがぎこちなく、妖しい興奮は高まっているものの、緊張と戸惑いに絶頂は迫ってこなかった。

手が疲れ、朝井は諦めたように動きを止めた。

「どうしたの。射精するまでしなさい」

「で、できません。そんなに見られていたら」

朝井は降参するように言った。

「そう。私が手伝えれば何とかなる？ それとも、私はタイプではないかしら？」

「そんなことないです。部長はとっても綺麗です。今まで会った人の中で一番」

お世辞ではなく、朝井は心からそう言っていた。男兄弟だけだから、前からお姉さんタイプが好きだったのだ。初体験も、年上の女性に手ほどきされたいという願望を持つ



ていた。結局、十代二十代とも幸運には恵まれずソープに行ってしまったが、今もその願望は消えることがなく、オナニーの妄想も美女に弄ばれることばかり考えていたのである。

「そう」

紗貴子は小さく頷くと、足早に玄関に行つてドアをロックして戻り、手早くスーツを脱ぎはじめたのだ。

服が脱ぎ去られるたび、甘い匂いを含んだ生ぬるい風が朝井の鼻腔を撫で、みるみる紗貴子の白い肌が露出していった。

紗貴子の肌は白く滑らかで、長いストレートの黒髪とのコントラストが鮮やかだった。たちまち紗貴子は下着姿になった。ブラもショーツも黒だ。脚はスラリと長いが、モデルのようなほっそりした体型ではなく、何とも見事な巨乳で肉づきが良く、キュツとウエストがくびれているから、なおさら腰の豊満なラインが際立った。

紗貴子は、下着を取り去る動作にもためらいがなく、たちまち朝井の目の前で、妖しい美女が一糸まとわぬ姿になった。

まるで夢を見ているようだ。

朝井は頭がぼうつとなり、一体どうしてこのような展開になったのか理解できなかつた。

全裸になった紗貴子は無言で、そつと朝井に添い寝してきた。

(続く)

睦月影郎 (むつき・かげろう)

昭和31 (1956) 年1月2日生まれ。山羊座、B型。神奈川県横須賀市出身。県立三崎高校卒業後、看板屋、工員、飲食店勤務などを経て、23歳で官能作家デビュー。

熟女もの少女ものに関わらず、匂いのあるフェチックな作風を得意とする。本名の奈良谷隆では戦記やアクション小説を書き、また、ならやたかし名義ではマンガやイラストも描く。